

平成22年度生活創造大学情報文化科提言

情報文化科では、「歴史から見てみよう！多可町の文化と暮らし」をテーマに計画を立てました。

講座では、桑村先生の「江戸時代の農村の暮らしと文化」で、多可町に残っている古文書を元に、そこから分かる江戸時代の厳しい暮らしと、その中であって豊かな暮らしを求めた人々の工夫や努力も知ることができました。

また、多可町の伝統芸能のひとつ播州歌舞伎について、中村和歌若さんから「播州歌舞伎の昔と今」を聞き、なぜ中区に播州歌舞伎が残ってきたか、昔の様子と現在の取組について学びました。

学外研修は、「遷都1300年奈良の都」を訪ね、遠い昔に思いをはせ、唐などの外国との交流や、国の成り立ちを、有名ボランティアのガイドで楽しく学んできました。また、バスで多可町を巡り、歴史ある金蔵寺、東山古墳群を見学し、そこで行われていた芸能祭での播州歌舞伎の発表会をじっくりと鑑賞しました。

このような取組の中から、以下の3点を提言と致します。

1, 暮らしの資料館の設置

昭和の前半まで、私たちは電気やガスの代わりに、薪を使っていました。どの家にも「かまど」がありました。「かまど」のある生活はもう歴史の彼方に追いやられています。

農作業や暮らしの道具の移り変わりも大きいものがあります。

それら暮らしの道具、農機具など、以前の旧町でも集めていたようです。集めるだけで、そのまま眠っているような気がします。

現在、庁舎や保育園の統合などで、不要となった公共の建物があります。それらを利用して、三区でばらばらに集めている暮らしの道具類を整理して、展示してはどうでしょうか。これからの世代にぜひ伝えていきたいと思えます。

また、もし空いた古民家でいいのがあれば、それを町で所有し、古民家を使って資料の整理展示ができれば、さらにすばらしいと思えます。そこでは昔の暮らしを体験できる、子供たちの学習の場ともなります。

2, 仕事歌、暮らしの歌の発掘、整理

桑村先生の講座のなかで、先生が「昭和50年代の西脇高校教諭の頃、生徒たちと一緒に仕事歌の収集をしたことがあった。だいぶ集めたが、まだ途中で転勤になりこの取組も終わった。」という話がありました。

この話に触発された講座生の話の中で、加美区でもこんな歌があった、中区

でも、八千代区でも・・・と話が弾みました。いくつかは以前に収集、故橋本喬雄先生により採譜され、合唱団で歌われたのがあります。でも、まだまだ集落にはいろんな仕事の歌が残っているのではないかと、また誰かが収集したものがそのままになっているのではないかと思います。

そこで、この講座で学んだ有志が中心となり、各地に残っている仕事歌、暮らしの歌の発掘と収集、整理に取り組もうと思っています。

町の広報誌などで呼びかけて、活動を始めるつもりです。

昔の仕事歌や暮らしの歌を収集することは、先人の暮らしの証しを記録することでもあります。「故きを温ね、新しきを知る」ように、現在の自分たちの暮らしを見つめ、考えるきっかけにもなっていくはずですよ。

3、播州歌舞伎の保存

縁あってこの多可町に残された播州歌舞伎。播州でも多可町だけになっています。現在では、播州歌舞伎クラブ、カブキッズ多可、中町北小学校で、活動が行われています。

いろんなところに資料等があるようです。これらの資料の整理と、播州歌舞伎に取り組む若者が少しでも増えるように、また活動がしやすいように、町でも応援をお願いしたいものです。

まわりには播州歌舞伎を見たことがないという人が多くいます。私たちは、少しでも多くの人に見ていただき、理解をしていただくことに努め、町民のほりとして、その保存に少しでも力を注ぎたいと思います。